

過去10年間の看護学実習における看護倫理に関する文献検討

植村 由美子*¹

大島 弓子*²

抄録 Summary :

本研究は、看護学実習における看護倫理に関する文献検討から、研究の特徴と課題を明らかにし、看護基礎教育における看護倫理教育への示唆を得ることを目的とする。対象文献は、過去10年に発行された文献から、医学中央雑誌のweb検索システムで、「看護」「倫理」「実習」をキーワードとして検索した287件、さらに看護学実習を主題に限定し再抽出できた58件であり、それぞれ内容を分析した。その結果、次のことがわかった。1. 社会的要請をうけ、看護倫理に関する研究はコンスタントに行われている。2. 多い研究は学生を対象とした質問紙調査29件(50.0%)などであり、多い内容は学生が看護学実習で捉えた倫理的課題22件(37.9%)などであった。今後の課題として、学生が実習で捉えた倫理的課題への対処、看護倫理教育の方法の検討、患者の個人情報保護と学生の知的財産の両側面から検討した記録の保管などに関する研究の促進が挙げられた。

キーワード Key Words

看護学実習 (nursing clinical practice), 看護倫理 (nursing ethics), 文献検討 (literature review)

I. はじめに

昨今、看護の領域において、倫理に関する関心は高まっており、さまざまなところから見解等が出されている。看護師の倫理綱領として、国際看護師協会が『看護師の倫理綱領』(1953年, 改訂2012年)を、日本看護協会が『看護者の倫理綱領』(1988年, 改訂2003年)を公表した(日本看護協会監, 2012)。日本の看護教育では、1967年のカリキュラム改正から、科目として「看護倫理」は削除されたが、2004年文部科学省から出された『看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標』(文部科学省online: 04032601.html)では、「人の尊厳と人権の擁護」の視点の重要性が明記され、看護倫理は看護学教育のコアと記述された。また、日本看護系大学協議会は、2008年に看護倫理を基盤に据えた看護職を育成するための基本的な考え方を示す目的で、『看護学教育における倫理指針』を作成した(日本看護系大学協議会online: 031008cite.html)。

看護基礎教育における看護倫理に関する研究において、看護系大学のシラバスを分析した鶴若ら(2013)は、42%の看護系大学に「看護倫理」の科目があることを明らかにした。しかし、高橋(2011)は、看護倫理教育が進展していない現状を指摘している。

*1 京都橘大学 *2 豊橋創造大学

本研究は、看護基礎教育のなかでも、看護学実習における看護倫理に着目する。看護実践を通して看護を学ぶ看護学実習において、学生は倫理的課題を捉え判断しており、学生を教育指導する教員や指導者も倫理的課題に直面し何らかの対処をしている。この実践こそが、実践する看護倫理である。また、看護は、「看護本来の目標を達成することが第一」であるが、それは「倫理的な要請」と重なり合うのである(湯楨他, 1977, p. iv)。つまり、看護と看護倫理は重なり、その課題も重なると考える。そこで、本研究では、看護基礎教育の実践である看護学実習に着目し、看護倫理に関する文献検討から、研究の特徴と課題を明らかにし、看護基礎教育における看護倫理教育への示唆を得ることを目的にする。

II. 目的

過去10年間の日本の看護学実習における看護倫理に関する文献検討から、研究の特徴と課題を明らかにする。

III. 方法

1. 文献の選定

対象文献の検索は、医学中央雑誌web版Ver.5(2012)の検索システムで、2005年から2014年の10年間に発行された会議録を除いたフィールドで行った。検索年次を過去10年間と設定した理由は、2004年の『看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標』と、同年に公表された『臨床研究の倫理指針』(厚生労働省 online: q-a_rinsyoukenkyu.pdf)を踏まえた研究がされるであろうと考え、それぞれの公表翌年の2005年を検索開始年次としたからである。

2. 1次調査

1次調査は、文献の全体傾向を知るために行った。対象文献は、前述の対象フィールドにおいて、検索語を「看護」「倫理」「実習」とし、抽出できた287文献である。287文献に、発行年次の新しいものから順に、1から287まで文献番号を付与した。そして、文献の発行年次、研究対象領域について分析を行った。

3. 2次調査

2次調査は、より主題に即した文献を詳細に分析するために行った。対象文献は、1次調査の対象文献のうち、看護学実習における看護倫理を主題とした研究文献に限定し、再抽出できた58文献とした。その際、文献番号は、1次調査で付与したものを引き続き使用した。この58文献において、研究者、研究対象者と方法、研究内容について分析を行った。

4. 研究の信頼性

分析過程において、文献の記述内容を忠実に読みとり、研究者間で確認し、信頼性を確保した。

IV. 結果

対象文献は、287件であった。

1. 1次調査

1) 発行年次

発行年次で最も多かったのは、2005年の43件（15.0%）であり、次いで、2008年の35件（12.2%）、2013年の33件（11.5%）などであった。毎年20件以上の文献があり、「看護」「倫理」「実習」をキーワードとする文献は、コンスタントに掲載されていた（図1）。

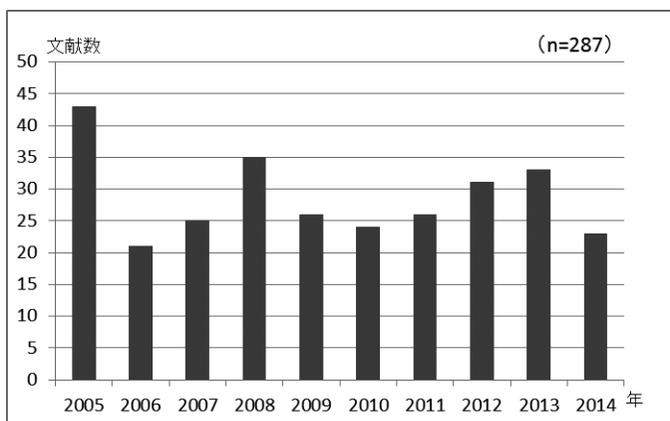


図1. 287文献の発行年次別文献数

2) 研究対象領域

対象文献の領域別分類で最も多かったのは、看護基礎教育全般の106件（36.9%）であり、次いで精神看護学32件（11.1%）、小児看護学22件（7.7%）であった（図2）。看護基礎教育全般を除くと、精神看護学や小児看護学が多かった。

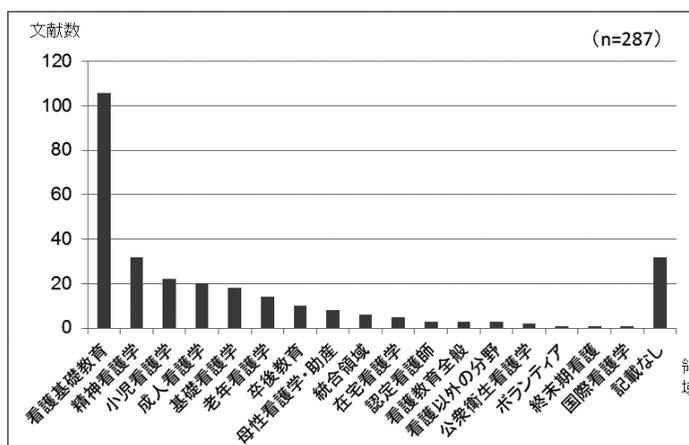


図2. 287文献の領域別文献数

2. 2次調査

対象文献は、58件であった(表1).

表1. 看護学実習における倫理を主題とした58文献

文献番号	著者	タイトル	雑誌
13	青森広美	3年課程看護専門学校の教員が臨地実習において指導した倫理上の問題場面	埼玉医科大学看護学科紀要7巻1号 Page19-28,2014.
20	白木裕子, 松澤明美, 津田茂子	小児看護学実習における看護学生が捉えた子どもの権利	日本小児看護学会誌23巻1号 Page22-28,2014.
24	今留忍, 佐藤智子, 柳橋正智, 亀山亜季, 森顕子	看護学生の守秘義務に関する認知と守秘義務違反に相当する行為との関連	看護教育研究学会誌5巻2号 Page25-32,2013.
63	長田登美子, 箕浦とき子, 足立久子, 杉浦浩子, 小松妙子	臨地実習指導場面における看護教員の倫理的意識と倫理的行動の特徴	岐阜看護研究会誌5号 Page11-21,2013.
64	押領司氏, 佐藤みつ子	看護学生が精神看護学実習で体験した倫理的課題と学び	看護教育研究学会誌4巻2号 Page23-29,2012.
76	菅沼澄江, 根岸京子, 高野公子	看護学生の臨地実習における看護倫理面での指導の現状 臨地実習指導者の立場から	東都医療大学紀要22巻1号 Page66-73,2012.
78	柴田恵子, 川本起久子	看護学実習における生命倫理の学びと学習指針の方向性	生命倫理22巻1号 Page102-111,2012.
83	梅田寧美, 林カオリ, 平田美紀	小児看護学実習における子どもの権利に関する学生の学び	日本看護学会論文集: 看護教育42号 Page84-87,2012.
86	川本起久子, 柴田恵子	臨地実習指導者の生命倫理に関する経験と学生指導状況	日本看護学会論文集: 看護総合42号 Page342-345,2012.
89	信里ユリエ, 井原美由紀, 片岡睦子	精神看護学実習における看護学生の倫理的体験	中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究会誌7巻 Page184-187,2012.
93	高尾憲司, 馬場口喜子, 平井美幸, 園田悦代	小児看護学実習における倫理の学び 学生のレポートから分析	京都府立医科大学看護学科紀要21巻 Page37-42,2011.
94	地内彰子, 栗原加代, 山岸千恵, 坂江千寿子	精神看護学実習の倫理的課題の検討に関する看護スタッフの認識 カンファレンス参加経験の有無に焦点をあてて	茨城キリスト教大学看護学部紀要2巻1号 Page19-28,2011.
98	谷口さゆり, 石本陽子, 氏平美智子, 山下妙子, 土井英子, 小野晴子	臨地実習で看護学生が感じる倫理的葛藤と対処行動 コールバーグ理論に基づいて	岡山県看護教育研究会誌35巻1号 Page11-20,2011.
104	北川さなえ	臨地実習において看護学生が倫理的判断を要する場面	東京厚生年金看護専門学校紀要13巻1号 Page1-4,2011.
105	小野晴子, 土井英子, 山下妙子, 氏家美智子, 石本陽子, 谷口さゆり	臨地実習で看護学生が感じる倫理的葛藤と教育上の課題	日本看護学会論文集: 看護管理41号 Page156-159,2011.
107	塩見和子	成人看護学実習における学生指導に関わる「倫理的事象」とそれを支える「指導の倫理観」 臨床の実習指導者の学生指導と看護学生の学びの関連性を探る	インターナショナルNursing Care Research10巻2号 Page75-83,2011.
108	高橋永子, 平瀬節子, 野村晴香	基礎看護学実習IIで学生が気づいた倫理的場面	インターナショナルNursing Care Research10巻2号 Page29-38,2011.
109	塩見和子, 柘野浩子, 小野晴子	成人看護学実習における学生の胃腹に関する倫理的側面の認識調査	インターナショナルNursing Care Research10巻1号 Page53-64,2011.
112	両羽美穂子, 松下光子, 北山三津子	学士課程における看護学実習を通じた倫理的対応に関する教育の方法	岐阜県立看護大学紀要11巻1号 Page55-62,2011.
114	関谷由香里	初めての臨地実習において看護学生が抱いた倫理的な疑問	日本看護学会論文集: 41号 Page90-92,2011.
116	橋則子, 宮城由美子, 吉川未桜	小児看護実習で看護学生が学んだ子どもの権利を尊重した関わりについて	福岡県立大学看護学研究紀要8巻1号 Page19-25,2011.
119	柴田恵子, 川本起久子	看護学実習での生命倫理の学び	生命倫理20巻1号 Page174-182,2010.
121	土井英子, 小野晴子, 山下妙子, 氏平美智子, 石本陽子, 谷口さゆり	臨地実習での看護学生が感じる倫理的葛藤	岡山県看護教育研究会誌34巻1号 Page9-1,2010.
123	北川 さなえ	臨地実習で看護学生が感じる倫理的問題場面	東京厚生年金看護専門学校紀要12巻1号 Page1-4,2010.
124	伊藤政子, 井上真弓	学生が臨地実習でとらえた看護倫理問題と看護倫理教育の課題	横浜創英短期大学紀要6号 Page47-54,2010.
126	内田史江, 西岡美作子, 田村美子, 森田なつ子	基礎看護学実習IIIにおいて学生自身がとらえた医療従事者としての持つべき人間性についての自己像	看護・保健科学研究誌10巻1号 Page176-182,2010.
131	坪井桂子	高齢者看護学実習における看護倫理上の課題に取り組むための教育方法の検討	岐阜県立看護大学紀要10巻2号 Page19-27,2010.
136	土路生明美, 鴨下加代, 松森直美	小児看護実習における倫理教育の検討 倫理的ジレンマに関する学生の自由記述の内容分析から	日本看護学会論文集: 看護教育40号 Page212-214,2010.
137	菅沼澄江, 安藤高子, 松元由美	看護学生の倫理的問題及び倫理的判断能力に関する研究 臨地実習場面の振り返りから教育のあり方を考える	日本看護学会論文集: 看護教育40号 Page48-50,2010.
148	土井満美子, 沼元千江, 立石由香, 坂手佐千子	小児看護学実習過去5年間の倫理カンファレンスレポート分析	津山中央病院医学雑誌23巻1号 Page123-127,2009.
153	佐藤初美, 大黒理恵, 古宇田美美, 後藤孝子, 齋藤やよい	看護学生の实習後の個人情報取扱いの実態と認識	お茶の水看護学雑誌4巻1号 Page22-28,2009.
154	富律子	看護学生が成人看護学実習で体験した倫理的問題と状況認識	川崎市立看護短期大学紀要14巻1号 Page109-111,2009.
162	田村美子, 湯浅節, 中柳美恵子, 杉原トヨ子	看護学生が臨地実習で認識した倫理的意思決定場面	日本看護学会論文集: 看護教育39号 Page328-333,2009.
165	金澤曉民	看護学生の倫理的感受性の変化の実態 2年次と3年次を比較して	中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究会誌4巻 Page246-249,2008.

文献番号	著者	タイトル	雑誌
175	真継和子, 宮島朝子	学生が捉えた倫理的課題と看護者に求める倫理観	健康科学: 京都大学医学部保健学科紀要4号 Page39-44,2008.
191	石坂牧子	臨地実習における患者の個人情報保護についての実態調査 実習記録の取り扱いの分析から	日本看護学会論文集: 看護教育38号 Page317-319,2008.
193	大畑政子, 原祥子	老年看護学実習における学生の倫理的ジレンマ	島根大学医学部紀要30巻 Page1-9,2007.
198	金澤暁民, 伊藤由紀枝, 常石光美, 口藏真由美, 榎洋子	当校学生の2年次における倫理的感受性の実態	中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究会誌3巻 Page294-29,2007.
205	白神佐知子, 古城幸子, 木下香織, 真壁幸子, 太田浩子, 金山時恵, 栗本一美, 土井英子	臨地実習での学生の看護ジレンマ(第1報) 看護ジレンマの対処過程と教育的対応	看護・保健科学研究誌5巻1号 Page181-188,2005.
209	今西誠子, 山本多香子, 山田豊子	倫理的な能力の向上に向けて(4)「看護学実習記録に関する確認書」「看護学実習記録に関する誓約書」を用いたことの効果	京都市立看護短期大学紀要32号 Page123-130,2007.
215	武森八智代, 青木早苗, 竹村多加, 信里ユリエ, 美馬夕布子, 玉川緑	看護学生がとらえる臨地実習における倫理的問題場面の意味	中国四国地区国立病院附属看護学校紀要2巻 Page27-3,2007.
221	明田朋子, 児島恵子, 渡邊めぐみ, 日栄美輪, 山田晃子, 伊原善恵	臨地実習における看護学生の倫理的体験の特徴 自記式アンケート調査による分類	大阪医科大学附属看護専門学校紀要13号 Page34-38,2007.
227	吉川明美, 井上千香, 松本京子	臨地実習における学生の倫理的行動に及ぼした要因	中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究会誌1巻 Page110-113,2005.
229	金子まゆみ, 上澤悦子	看護学生が臨地実習において看護倫理として認識していたこと	日本看護学会論文集: 看護総合37号 Page351-353,2006.
239	山田道代	看護倫理の教育的関わりに関する研究 臨床実習指導者役割モデルの検討	神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録31号 Page212-219,2006.
240	金子まゆみ	看護学生の看護倫理観 3年間の臨地実習修了時における看護学生の看護倫理観を分析して	神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録31号 Page85-91,2006.
243	岩村徳子, 松井弘美	臨地実習における子どもの権利の学習過程	日本看護学会論文集: 小児看護36号 Page137-139,2006.
245	寺田敦子, 瀬川睦子	臨地実習における看護学生のインフォームドコンセントに対する認識と倫理観の育成	ホスピスケアと在宅ケア14巻1号 Page20-25,2006.
246	白神佐知子	看護ジレンマに対する学生の対処過程の変化とその要因 3事例の分析から	新見公立短期大学紀要26巻 Page103-113,2005.
249	湯浅節, 田村美子, 白木智子, 中柳美恵子	看護学生が臨地実習で認識した倫理的意思決定場面とその支援者	日本看護学会論文集: 看護教育36号 Page182-184,2005.
250	斎藤一江, 石橋明子, 窪田好恵, 瀬川克子, 古市洋子, 溝口孝子	学生が受け持つことを依頼する際の患者への説明の実態(第2報) 臨地実習における患者への倫理的配慮	日本看護学会論文集: 看護教育36号 Page155-157,2005.
255	小野光美, 浅井さおり, 原祥子, 沼本敦子	老人看護学実習における倫理的課題に関する学習内容の分析	神戸市看護大学紀要9巻 Page75-84,2005.
259	土井満美子	小児看護学実習における看護倫理の意識付け 点滴静脈内注射を受ける児に焦点をあてたテーマカンファレンスの効果	日本看護学会論文集: 看護教育35号 Page142-144,2005.
260	古城幸子, 金山時恵, 真壁幸子, 白神佐知子, 太田浩子, 福原博子	看護学生の看護ジレンマの構造 臨地実習で感じた看護ジレンマ記録の分析	日本看護学会論文集: 看護教育35号 Page109-111,2005.
269	佐藤友美	看護学生が捉えた倫理問題 基礎看護学実習の体験の中で	日本看護科学会誌25巻3号 Page92-95,2005.
280	高島由貴, 澤田悦子, 泉川孝子, 松浦妙子, 大谷和代	医療安全から考える臨地実習体制 看護学実習における事故防止と看護倫理教育(2) 看護倫理教育による事故防止の有効性	看護展望30巻5号 Page616-620,2005.
282	泉川孝子, 高島由貴, 澤田悦子, 松浦妙子, 大谷和代	医療安全から考える臨地実習体制 看護学実習における事故防止と看護倫理教育 臨地実習におけるヒヤリ・ハット分析と教育活動の改善	看護展望30巻4号 Page488-495,2005.
284	大西香代子, 田高悦子, 大串靖子	臨地実習における個人情報の取扱いに関する研究	日本看護科学会誌25巻1号 Page23-30,2005.

1) 研究者

筆頭研究者の所属で最も多かったのは、大学の30件 (51.7%) であり、専門学校17件、短期大学6件と続き、病院所属の研究者も3件あった (図3)。筆頭者の所属が教育機関であった文献は53件 (91.4%) と、大多数を占めた。

2) 研究対象者と方法

研究対象者で最も多かったのは、学生の48件 (82.8%) であり、次いで、指導者・看護師6件 (10.3%)、教員3件 (5.2%) であった (表2)。学生を対象とした研究が、全体の8割以上を占め、非常に多かった。

研究方法で最も多かったのは、質問紙調査35件 (60.3%) であり、続いて、内容分析17件 (29.3%) であった。この2つの方法で行われた研究は、52件 (89.7%) であり、非常に多かった。

研究対象者と方法を組み合わせて分析すると、学生を対象にした質問紙調査の研究が29件 (50.0%)、学生の実習記録等を対象にした内容分析が15件 (25.9%) であり、多く実施されていた。

作成した質問紙や分析方法で、何らかの枠組みを参考にしていたものは、28件 (48.3%) と半数近くあった (表3)。多い順に、日本看護協会 (1999) 『小児看護領域で特に留意すべき子供の権利と必要な看護行為』6件、トンプソン他 (2004) 『倫理上の問題を識別する分類』5件、水野他 (1997) 『看護倫理教育に関する研究』4件、フライ他 (2010) 『倫理の原則』3件、日本看護協会 (2003) 『看護者の倫理綱領』2件と続いた。その他、複数の研究成果等を用いて独自の枠組みを作成しているものが3件、その他の枠組みを活用しているものが5件あった。比較的多様な枠組みが用いられていたこと、自由記述等からカテゴリ化を行っているものも半数近くあり、研究成果を統合する場合、文脈から意味内容を丁寧に読み取るプロセスを要した。

3) 研究内容 (no.は、文献番号を示す)

研究内容で最も多かったのは、看護学実習で学生が捉えた倫理的課題22件 (37.9%) だった。続いて、実習での倫理に関する学び11件 (19.0%)、個人情報取り扱い6件 (10.3%)、看護職者 (学生を含む) に求める倫理観・担う役割5件 (8.6%)、教員・指導者の指導の実際4件 (6.9%)、学生の発達3件、看護倫理に関する教育方法の検討2件、事故防止2件、その他3件であった (表4)。

研究内容で最も多かった看護学実習で学生が捉えた倫理的課題に関する文献において、それのみを明らかにしていたのが12件 (22文献中54.5%)、それに加えて学生の対処を述べていたのが6件、教育方法の検討も目的に含めていたものが4件であった (表4)。学生が倫理的課題を捉えた率は、5割以上が「ほとんどない」(no.104, 123) から、6割以上が「ある」(no.205, 227) と、研究によって差があった。学生が捉えた倫理的課題は多い順に、対象者の尊厳や権

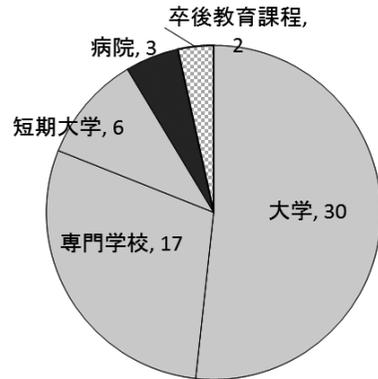


図3. 筆頭研究者の所属

利に関すること12件，医療者の言動やケアに関すること11件，患者への情報提供や意思決定に関すること7件，などであった（表5）．学生の意思決定や行動に関する研究では，倫理的課題を捉えた学生の半数以上が，他者（教員，指導者，学生）に相談3件など，何らかの行動をとっていた．

表2. 研究対象と方法（表内の数字は文献番号を指す）

対象者	方法	質問紙	内容分析	面接	複数	計	
学生		20,24,98,104,105,108,109,114,119,121,123,126,136,137,153,162,165,175,191,198,209,215,221,229,240,249,259,269,280 (計29)	64,83,93,116,124,13,148,154,193,205,245,246,255,260,282 (計15)	89,243 (計2)	78,227 (計2)	48	
	看護師・指導者	86,94,239,250 (計4)	107 (計1)	76 (計1)			6
	教員	63 (計1)	112 (計1)	13			3
	学校	284 (計1)					1
計		35	17	4	2	58	

表3. 活用している枠組み

活用している枠組み	文献番号	件数
日本看護協会『小児看護領域で特に留意すべき子供の権利と必要な看護行為』	83,93,116,136,175,259	6
トンプソン他『倫理上の問題を識別する分類』	104,123,124,165,269	5
水野他『看護倫理教育に関する研究』	121,205,193,255	4
フライ他『倫理の原則』	64,162,227	3
日本看護協会『看護者の倫理綱領』	193,255	2
複数の研究成果の活用	24,63,229	3
自身の研究の蓄積枠組み	78	1
コールバーク『道徳判断の発達水準と発達段階』	98	1
福井他『医療従事者が持つべきとされる人間性』	126	1
大西他『臨床実習における個人情報の取扱いに関する研究』	191	1
大日向他『初期看護学実習における学生の倫理的体験に関する検討』	221	1
計		28

表4. 研究内容の分類

内容	文献番号	件数
学生が捉えた倫理的課題	64,89,104,108,114,123,154,162,205,221,260,269 (計12)	22
+ 学生の意思決定や行動	105,121,137,198,227,249 (計6)	
+ 教育方法	124,136,193,255 (計4)	
実習での倫理に関する学び	20,78,83,93,109,116,119,215,229,243,245	11
個人情報の取り扱い	24,153,191,209,250,284	6
看護職者(学生を含む)に求める倫理観・担う役割	126,148,175,240,259	5
教員・指導者の指導の実際	13,63,76,239	4
学生の発達	98,165,246	3
倫理教育の方法の検討	112,131	2
事故防止	280,282	2
その他	86,94,107	3
計		58

表5. 主な研究内容の具体

研究内容	文献番号	件数
学生が捉えた倫理的課題（文献の重複あり）		22
対象者の尊厳や権利に関すること	89,104,108,114,123,124,136,137,154,198,255,269	12
医療者の言動やケアに関すること	105,108,124,137,154,198,205,227,249,260,269	11
情報提供や意思決定に関すること	64,104,108,137,154,198,227	7
個人情報と守秘義務,プライバシーに関すること	108,137,154,221	4
身体拘束を含め対象者の安全に関すること	105,108,154	3
安全を含めた環境に関すること	89,114	2
学生が実習をするそのものに関すること	108,198	2
学生の看護師への気がね	108,198	2
患者の気持ちに添えないこと	198,249	2
その他	105,193	2
学生の意思決定や行動		4
他者(教員,指導者,学生)に相談	105,121,249	3
その他	105	1
倫理に関する学び		11
自己決定や自己決定できないケース	78,119,245,109	4
対象者の権利	20,93,116	3
説明と同意	83,243	2
その他	229,215	2

次いで多かった研究内容である倫理に関する学びは、自己決定や自己決定できないケースについて4件、対象者の権利3件、説明と同意2件などがあつた。

個人情報の取り扱いに関するものは6件あり、そのうち2件は、教育機関への調査であつた (no.191, 284)。学生の実習記録の保管について、実習中のみ保管するのは、72.6～95.5%と多くの学校で取っている方法であつた。また、実習指導者への調査から、患者に個人情報の取り扱いを説明しているケースは17.3%と少ないことが明らかにされた (no.250)。

看護職者(学生を含む)に求める倫理観・担う役割において、学生が考えるそれは、対象者の権利や人権を擁護することや、説明と同意を含めた適切なコミュニケーション、対象者への最小限になるような侵襲の配慮などであつた。

教員・指導者の指導の実際に関する4件の内訳は、看護教員を対象としていたもの2件、指導者を対象としていたもの2件であつた。看護教員が倫理的課題と捉えて指導した内容は、「人間の尊厳の尊重」「平等な看護の提供」などであつた (no.13)。指導者のうち、実習で倫理教育を行ったことがあると認識していたのは25%であつた (no.239)。

V. 考察

1. 研究の特徴

1) 文献数にみる研究の特徴

文献数の多さに影響している要因の1つに、社会の動向がある。文献数が多かつた年次は、日本看護協会(2004)が『看護研究における倫理指針』を作成した翌年の2005年、日本看護系大学協議会(2008)が『看護学教育における倫理指針』を作成した2008年、国際看護師協会(2012)の『看護師の倫理綱領』の見直しがあつた翌年の2013年であつた。このような社

会の倫理への関心の高まりが、看護学教育における倫理への関心の高さに影響し、文献数の増加に影響したことが推測された。これは、勝山他(2010)が指摘した、日本看護協会が示した『看護者の倫理綱領』が、看護倫理に関する文献の増加につながったことと同様の傾向であった。もう1つの要因として、対象者の権利擁護への関心が考えられた。研究で多かった領域は、精神看護学や小児看護学領域であった。これらの領域の看護の対象者は、意思決定に関する能力に課題があることが多いため、その対象者の権利擁護等への関心が高まり、文献の多さに影響したと考える。

2) 方法と内容にみる研究の特徴

2次調査(対象58文献)において、筆頭研究者の所属が教育機関53件(91.4%)と9割以上であり、対象者が学生48件(82.8%)と8割以上を占めた。教員への調査で、学生を対象にした研究を行ったことのある教員が、7割近くいたことが明らかになっている(石岡他, 2013)。対象者に偏りがあることは、対象者の課題への関心の高さもあろうが、研究者にとって、対象者へのアクセスの容易さも影響していると考えられる。一方、教員を対象とした研究が3件と少ないのも特徴だといえる。研究者の大多数が教育機関に所属しているのであれば、教員はアクセスしやすい対象者であると考えられるが、研究が少なかった。教員が教員自身を研究対象者とするには、ハードルがあると考えられた。

また、研究方法の特徴として、作成した質問紙や分析において、何らかの枠組みを参考にしていたものは、28件(48.3%)と半数近くあったが、複数の枠組みから独自の枠組みを作成していた研究や、枠組みを持たずカテゴリー化を行っている研究も半数近くあった。そこから、統一した表現での結果が少なく、研究が蓄積されにくいという傾向につながるともいえた。

研究内容で3番目に多かったのは、患者の個人情報の取り扱い6件であった。これは、個人情報保護法の制定など社会的要請を受けた看護教育への着目点の1つと考えられた。

2. 看護学実習における看護倫理に関する課題

少なかった研究の課題として、看護学実習で学生が捉えた倫理的課題の分析や対処への支援に関する研究が6件(58文献中10.3%)、倫理教育の方法の検討が6件(10.3%)、学生を支援する教員や指導者の教育指導の実際に関する研究が4件(同6.9%)、などが挙げられる。そこで、学生が捉えた倫理的課題の対処や教育支援に関する研究の必要性が示唆された。また、看護実践における倫理に関する文献レビューを行った勝山他(2010)は、看護倫理の知識を実践に結び付けることの不明確さを指摘している。加えて、看護学実習と学内学習との連動の必要性も指摘されている(文献no.124)。そこで、看護学実習と学内での看護倫理に関する学びの連動に関する研究の必要性も示唆された。

さらに、学生を教育指導する教員や指導者が実習教育で直面する倫理的課題への対処に関する研究の必要性も示唆された。これは、教員や指導者の倫理的課題への対処は、学生の倫理的課題の対処に関連すると考えられているからである。中嶋らは(2012)、学生は身近な人の行動を実感することで、その正しさを判断すると述べている。そうであるならば、看護

学実習において、学生の身近な存在になる教員や指導者が直面する倫理的課題への対処についての研究は、学生の職業倫理を育む上で重要になると考えられる。

そして、社会的要請の課題として、3番目に多かった研究内容である看護の対象者の個人情報に関する内容（文献6件、10.3%）が挙げられる。対象者の個人情報の保護や人権尊重とともに、学生の学習成果物である実習記録を知的財産として保管・活用する方法の検討、患者への看護学教育への協力の依頼についても検討が必要であると考えられた。

3. 看護倫理教育の深化に向けて

学生の倫理的な看護実践のためには、倫理的能力を促進していくことが重要であろう。倫理的能力の構成要素として、倫理的に「知ること」「知覚すること」「振り返ること」「行うこと」「あること」が考えられている（ギャラハー、2008, 188）。看護学実習は、それらすべてが実践できる場である。そこで、学生が看護学実習において捉えた倫理的課題を、教員ではなく学生が分析し、対処していくこと、そしてそれを支援することが、重要であると考えられる。また、学内での学びを実習に適用させていくだけではなく、看護学実習での学びを学内に持ち帰り分析し、振り返る教育実践も重要になると考える。

加えて、看護学実習は、看護職の資格をもたない学生が、看護実践を通して看護を学ぶ場である。つまり、患者家族の協力がなければ成り立たない。そこで、患者家族の人権に十分配慮しながら、看護学実習を成立させていくための環境調整が必要だと考える。

VI. 結論

過去10年間の看護学実習における看護倫理の文献検討から、次のことが分かった。

1. 社会の要請を受け、看護倫理に関する研究は、コンスタントに行われている。
2. 研究方法で多かったのは、学生を対象とした質問紙調査29件（50.0%）と、学生の実習記録の分析15件（25.9%）であった。研究内容で多かったのは、学生が実習で捉えた倫理的課題22件（37.9%）であった。
3. 今後の課題として、学生が実習で捉えた倫理的課題への対処、看護教員や実習指導者が直面した倫理的課題と対処、患者の個人情報保護と学生の知的財産の両側面から検討した実習記録の保管などに関する研究の促進が挙げられた。

本研究は、平成25年度～27年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究（C）（課題番号25463379）「看護教員と実習指導者が臨床実習教育で直面する倫理的ジレンマと意思決定に関する研究」の一部である。また、第35回日本看護科学学会にて本研究の一部を発表した。

文献

フライ, S, ジョンストン, M. / 片田範子, 山本あい子訳 (2010) : 看護実践の倫理 第3版, 日本看護協会出版会.

- 福井次矢, 浅井篤, 大西基喜編 (2003): 臨床倫理学入門, 医学書院.
- ギャラハー, A (2008): 看護倫理の教育/デベイス, A. 他編・小西恵美子監訳 (2008): 看護倫理を教える・学ぶ 倫理教育の視点と方法, 日本看護協会出版会.
- 石岡洋子, 平野互, 小野美喜 (2013): 看護学生を対象にした質問紙調査を行う際の倫理的配慮に関する実態調査, 日本看護倫理学会誌5 (1), 12-21.
- 勝山貴美子, 勝原裕美子, 星和美, 他 (2010): 過去5年間の倫理に関する研究の特徴と今後の課題, 日本看護倫理学会誌, 2 (1), 77-86.
- コールバーグ, L, レバイン, C, ヒューアー, A. /片瀬一男, 高橋征仁訳 (1992): 道徳性の発達段階 コールバーグ理論をめぐる論争への解答, 新曜社.
- 水野智子, 今川詢子, 長谷川真美, 他 (1997): 看護ジレンマと看護倫理教育に関する研究 (第2報) —基礎看護実習を経験した学生の分析—. 埼玉県立衛生短期大学紀要, 22, 55-63.
- 中嶋尚子, 鈴木真理子, 吉岡恵, 他 (2012): 看護学生の職業倫理の涵養にロールモデルは有効か 学生の捉えるロールモデルから, 日本看護倫理学会誌4 (1), 3-8.
- 日本看護協会 (2004): 看護研究における倫理指針.
- 日本看護協会 (1999): 小児看護領域の業務基準 「小児看護領域で特に留意すべき子どもの権利と必要な看護行為」.
- 日本看護協会監修 (2012): 新版 看護者の基本的責務, 日本看護協会出版会.
- 大日向照美, 堀口雅美, 酒井英美, 他 (2002) 初期看護学実習における学生の倫理的体験に関する検討, 札幌医科大学保健医療学部紀要, 5, 35-42.
- 大西香代子, 田高悦子, 大串靖子 (2005): 臨地実習における個人情報の取扱いに関する研究, 日本看護科学会誌, 25 (1), 23-30.
- 高橋衣 (2011): 過去5年間の看護系大学における「看護倫理」教育に関する文献検討, 東京女子医科大学看護学会誌, 6 (1), 81-89.
- トンプソン, J, ジョンストン, H. /ケイコ・イマイ・キシ日本語版監訳 (2004): 看護倫理のための意思決定の10のステップ, 日本看護協会出版会.
- 鶴若麻里, 川上祐美 (2013): シラバスから見る看護学士課程の「看護倫理」教育, 日本看護倫理学会誌, 5 (1), 71-75.
- 湯槇ます, 小玉香津子, 薄井坦子, 他編 (1977) 新訳・ナイチンゲール書簡集 —看護婦と見習生への書簡, 現代社.
- 厚生労働省 「臨床研究の倫理指針 2004/12/28」
http://www.med.kyushu-u.ac.jp/crc/rinri/pdf/sisin/q-a_rinsyoukenkyu.pdf (2015年11月23日)
- 文部科学省 「看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標」 2004/3/26 看護学教育の在り方に関する検討会報告」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018-15/toushin/04032601.htm (2015年11月23日)
- 日本看護系大学協議会 「看護学教育における倫理指針 2008/12」
<http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/031008cite.html> (2015年11月23日)